「プリーモ・レーヴィ―アウシュヴィッツを考えぬいた作家―」特別記念講演会報告[i]

加 國　尚 志
（立命館大学国際平和ミュージアム副館長）

立命館大学国際平和ミュージアムでは2011年秋季特別展として、「プリーモ・レーヴィ―アウシュヴィッツを考えぬいた作家―」展を開催した。

ユダヤ系イタリア人作家プリーモ・レーヴィ(1918-1987)は、イタリアのトリーノに生まれ、化学を専攻していたが、イタリアのファシズム体制に対するパルチザン闘争中に捕まり、1944年2月にアウシュヴィッツ強制収容所に送られた。化学者であったこと、語学が堪能であったことが幸いして、彼は奇跡的に生還したが、イタリアへ帰還後はアウシュヴィッツでの体験を証言し、なぜアウシュヴィッツのような非人間的な虐殺装置が可能となったのかを思考することが彼の生涯の責務となった。その生涯は、苦痛に満ちた記憶を語り続けるという苦難との闘いであり、冷静な記述と分析により、そこで起きた出来事を伝えることで、アウシュヴィッツのような惨事を二度と繰り返させないという崇高な使命感に支えられたものであった。彼は自殺による最期を遂げるが、その生涯は、歴史を証言することの深い意味を私たちに教えてやまない。彼の残した『アウシュヴィッツは終わらない』(朝日選書)『溺れるものと救われるもの』(朝日新聞社)『休戦』(岩波書店）といった作品群は、20世紀が経験した悲惨な出来事の誠実な証言として、アガンベンやドゥルーズをはじめとして現代の思想に大きな影響を与えている。

今回の展示はレーヴィの著作の多くを翻訳してこられた竹山博英氏（立命館大学教授）の監修により、レーヴィの遺品や自筆原稿などとともにレーヴィの生涯と作品を回顧する日本で初の展示である。竹山氏自らが取材した友人たちのインタヴューをはじめ、この展示の内容は、レーヴィの暖かく機知に富んだ人柄や複雑で陰影のある人間性に迫ることを目指している。その内容の詳細を知りたい方は、本特別企画展のカタログとして出版された竹山氏の新著『プリーモ・レーヴィ―アウシュヴィッツを考えぬいた作家』（言叢社）をお読みいただきたい。

この展示に合わせて、三回におよぶ公開記念講演会が行われた。ミュージアムでの展示について、より理解を深め、関心を高めるという意味で、講演などによる展示内容や主題についての事前・事後学習は非常に効果的である。また、プリーモ・レーヴィという、日本では一般的には馴染みの薄いイタリア人作家がどのような人物であり、思想として何を伝え、どのような影響を及ぼしたのかという点について、レーヴィの思想に影響を受けた方々の講演を聴いていただくことで、今回の展示の意義をより多くの方々に伝えることができよう。ミュージアムの展示企画と関連した講演会等の企画は、その意味で非常に重要である。

今回の連続講演会では、それぞれにプリーモ・レーヴィと関わりのあるお仕事をされてきた三人の講師の方々をお招きして、プリーモ・レーヴィの生涯と彼の遺したものの意味についてお話しいただいた。本特別企画展の監修者である竹山博英氏、『プリーモ・レーヴィへの旅』（朝日出版社）などの著作で証言者としてのレーヴィの存在を取り上げた徐京植氏（東京経済大学教授)、『償いのアルケオロジー』（河出書房新社）などの著作で、証言や歴史修正主義の問題などを論じた鵜飼哲氏（一橋大学教授）である。それぞれの方が、証言者としてのレーヴィが今日の私たちに考えることをうながしつづけている問題をクローズ・アップして語られた。

長年にわたってレーヴィの研究と翻訳にたずさわり、その生涯の事蹟を追い、故人と面会したこともある 竹山博英氏による「プリーモ・レーヴィ―アウシュヴィッツを考えぬくこと」（11月5日）は、レーヴィの生涯と人柄についての講演であった。レーヴィにとってのアウシュヴィッツとは、絶対的な栄養不足のもとでの強制労働により、思考や感情が停止状態になり、死を恐れる感覚さえ麻痺してしまう、徹底的な精神的破壊の体験であった。レーヴィはこうした精神的死の一歩手前でかろうじて踏みとどまったのだが、この体験はその後の人生に悪夢のようにのしかかった。彼はアウシュヴィッツの記録を書くだけでなく、詩や小説

でこの悪夢を消化し、他人に通ずる「言葉」として作品化しようとした。この悪夢が生きる喜びを奪うことを意識しながら、レーヴィは勇気を持って、証言者、文学者としての立場を貫こうとした。彼の死は悲劇であったが、その知的で誠実な姿勢は、彼の作品を読むものにある種の感動を、そして希望や勇気を与える、と結論を述べられた。この講演はレーヴィの人柄についての洞察に基づく、文学者レーヴィを紹介するものだった。

つづいて徐京植氏の「断絶の証言者プリーモ・レーヴィ」（11月12日）では、レーヴィの著作との出会いの衝撃が語られた。徐氏は、「証言不可能なものを証言すること」を「断絶の証言」としてとらえ、レーヴィがこのアポリアに耐えることを貫きながら、多声的で豊穣な歴史像を示し、ヨーロッパ人文主義の最良の姿を継承する人物であることを述べられた。そのうえで、徐氏は、「証言は可能か？」という問いが、3月11日の大震災と福島原発事故以降の日本を生きる人間たちにつきつけられていることを指摘した。「証言は伝わらない、しかし伝えなくてはならない」というアポリアを意識するとき、レーヴィの残した作品の歴史的重要性が迫ってくると締めくくられた。

最終回は、デリダやジュネの翻訳や著書『主権の彼方で』で知られる鵜飼哲氏による「「人間であることの恥」ふたたび―2011年の経験から」（11月19日）であった。鵜飼氏はレーヴィの著作の中に「生を肯定する例外的な力」と同時に、「証言者として生き続けることの固有の困難」が読み取られることを指摘した。強制収容所のような極限状況に置かれた人間とそれを目撃した人間の感じる「恥」の感情が、「人間であることの恥」として描かれたことに、レーヴィの重要性がある。鵜飼氏は、この「人間であることの恥」の感情が、アラブの春のような革命的蜂起の動因にある「倫理的なもの」であることを指摘したうえで、今回の大震災や原発事故で、今までの東北地域の置かれて来た状況や、原発に依存した社会で生きてきたことに対する「人間であることの恥」の感情が経験されていることを述べた。レーヴィは、人間を極限状況に追い込むことへの共犯性について「灰色の領域」として克明に記述したが、震災後の状況を生きる私たちにとって、「人間であること」をたがいに見つめ合う契機を獲得するために、レーヴィの著作は、なお多くの示唆を与え続けてくれることを鵜飼氏は指摘した。

レーヴィについて語ることが、東日本大震災と原発事故後の日本の状況の中で、何を考え、どのように生きていくのかという問題と結びつけられていた点が印象的であった。今回の企画展は前年度より企画・準備されてきたものであるが、強制収容所での経験を証言するレーヴィの生涯を回顧することが、思わぬ形で私たちに具体的な意味を持つことになったのである。もとより収容所の経験と被災の経験とを単純に比較することは慎まねばならないとしても、大震災と原発事故以降の私たちの思想や生き方に欠かすことのできない大切な何ごとかを、レーヴィは遺していったのではないだろうか。そしてそれこそが、私たちが歴史から学ばなければならない事柄であろう。

レーヴィがアウシュヴィッツの非人間的な経験について、それを二度と繰り返さないために証言した言葉の数々が、日本に伝えられ、それが震災や原発事故の極限的状況を生きなくてはならない人間の姿を照らし出すものとなった。アウシュヴィッツについては、かつてフランスなどを中心に表象不可能性をめぐる議論があったが、証言不可能なものについての証言というアポリア、また「人間であることの恥」という感情に耐えることもまた、現代の芸術や文学がこの不可能性を引き受けることによってしか可能でないことを教えてくれるものなのであった。ミュージアムの展示も、この「証言不可能なものの証言」をいかに「展示」という形式の中で伝えていくのか、そのことが強く問われている。国際平和ミュージアムは、戦争などについての歴史的な資料を展示している。展示は、「証言不可能なものの証言」という「アポリア」にどのように答えるものであるべきなのか。広くとらえれば、「展示」も一つの証言行為であり、収蔵も一つの記録行為である。その意味では、ミュージアムという場で今回の講演会が行われたことは主催者にも示唆的なものであった。「証言不可能なもの」を「いかに」展示するか。「証言不可能なもの」の「何を」展示するのか。そして「証言不可能なもの」の展示によって、参観者に何を伝えるのか。「人間であることの恥」の感情を訴えながら「人間であること」をたがいに見つめ合うことを可能にする展示とはどのようなものなのか。レーヴィが言葉の中で苦闘しながら生み出した作品が問いかけるものは、アウシュヴィッツ以降のミュージアムにとっても、その在り方や方法論を再考させるものであると言えよう。

この展示では、レーヴィの遺品の中から、レーヴィ自らが作った日本語ノートが展示された。自著が日本語に翻訳されることを知ったレーヴィが、日本語を勉

強するために漢字を正確に書き写し、そこにイタリア語の意味を付したものである。それは微笑ましいもので、ユーモアのセンスのあった故人を思わせるものであった。私はそのノートを見ながら、予期せぬ災厄に見舞われた人間が言葉に託そうとしたもの、言葉にすることが不可能なものと言葉がなしうる力の両極の間で耐えぬいたものの大きさを思わずにはいられなかった。レーヴィがアンダーラインを引いていた六つの日本語のうちの二つは、「死」(morte)と「美」(bello)だったのである。

i　この文章の一部は表象文化論学会のニューズレター『Repere』に掲載された。